

---

# 椅子取りゲーム

\_瑠姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

椅子取りゲーム

### 【Nコード】

N8831Z

### 【作者名】

— 瑠姫

### 【あらすじ】

その夢を知ると死ぬ。そんな噂、聞いたことないですか？

「ねえ、椅子取りゲームの噂、知ってる？」

親友の莉愛<sup>りあ</sup>がお昼休み、こんな話を始めた。

飲んでいた紙パックの苺ミルクを机の上に置いた。

いつもくだらない話しかしない莉愛の珍しく真剣な表情にビビったワケではない。

「椅子取りゲーム？」

「そう。椅子取りゲーム」

やたらと語尾を伸ばすクセのある彼女が

あっさりと返事をしたことにまず驚いた。

そして顔色が悪いし声も若干震えている。

「莉愛、大丈夫…？」

「…うん。ていうか椅子取りゲームの話なんだけど…」

体調を心配した私の質問に曖昧に答え彼女は椅子取りゲームの話に戻る。

そこまでその話をしたい理由がわからなかったけど

とりあえず彼女の話聞くことにした。

「椅子取りゲームをしている夢を見て、その夢の中で椅子取りゲームに負けると…」

彼女はすうっと息を吸ってその最後の一言を溜めた。

「夢の中に閉じ込められるんだって…」

は？

あまりにも単純でつまらなくて非現実的な話に耳を疑う。

「それがどうしたの？」

たずねても莉愛は黙って俯くだけだった。

椅子取りゲームの夢を見て死ぬ？

「莉愛…それがなに？」

「この話を聞いた人は誰かに言わないとこの夢を見るから…だから…」

え？

莉愛は誰かにこの話を聞いて、私に話した。

ということは私がその夢を見るの…？

うつん、見るか見ないかは置いておいて

莉愛は自分が見るのが嫌で、だから

私に話したの？

「莉愛…私死ぬかもしれないんだよ」

「だから…誰かに話さなきゃあたしも死ぬかもだったんだって…」

目をそらして言う莉愛。

謝りもせずに言い訳をする莉愛に無性に腹がたった。

「最低…親友にそんなこと話すなんて」

莉愛は呆然してます、というような顔だった。

今にも泣き出しそうな莉愛の顔を睨みつける。

2人の空間は緊迫した静寂に包まれた。

気まずい。莉愛もなにもいうワケでもなくこっちを見ている。

どうする、この場から離れるか……

そう思ったときちょうどよく5時間目の開始を告げるチャイムが鳴った。

それを合図にまだ呆然としている莉愛を冷たく見下ろし

苺ミルクがまだ少し入っている紙パックを乱暴に机の上から取り

莉愛の席と離れている自分の席に戻った。

席に戻り教科書を取り出すとともに担任が入ってくる。

授業が始まって私の怒りは収まらないままだった。

すると

「ねえ、機嫌悪いの？」

隣の席の鈴木君が声をかけてきた。

カチカチとならしていたシャーペンの手を止める。

いかにも人がいい人って感じの人だった。

それなのに彼はオタクグループと呼ばれクラスから嫌われている人という。

このお人好しで友達が少ない男にさっきの話をすれば……………



脳裏に浮かぶ、ひとつの提案。

でも、それでは莉愛と一緒にだ。

自分が恐怖から逃れるために他人を売る、そんな卑怯者と一緒にだ。

そうはなりたくなかった。

「ううん。なんでもないよ」

鈴木君はその返事を聞いて「そう」とだけ返事して

つまらない授業を受けるためノートと教科書に目を移した。

5、6時間目が終わり、下校。

莉愛とはあれからしゃべっていない。

帰宅したらもう覚悟を決めなきゃいけない。

携帯は持っていないから友達に連絡は無理。

家族は両親は仕事で帰りが遅く

兄は塾だ。

朝作っておいた冷たい夕飯を食べ

お風呂に入り

宿題を済ませて

寝ようと自分の部屋に入る。

「莉愛の馬鹿…」

ポツリと口の中でつぶやいた。

夢を見ることが怖いのではなく話されたことに怒っていたわけでもなく

莉愛が私を死んでもいいと思っていることに恐怖を感じた。

一緒にいた人が自分のせいで死ぬかもしれない

莉愛は何も感じないの？

馬  
鹿  
:

）

）

気が付けばひとつの椅子の周りに

私と一人の少女。

真っ白な部屋の中央に置かれたひとつのパイプ椅子。

流れているのは…童謡？

なんで椅子の周りを回っているんだろう。

ああ、そうか

椅子取りゲームしてるんだ。

理解できた瞬間

流れていた音楽はピタリと止まった。

「え…ッ」

パイプ椅子の背もたれ側にいた私は

その位置からはとてもじゃないが椅子に座る事などできなかった。

「あなたの負け」

「莉愛……起きなさい……！」



「ん…まだ6時じゃ…」

「あんと同じクラスの仲良くしてた子…死んだんだって…!!」

「…え」

「朝母親が起こしにいったら死んでたって…」

莉愛は

あの子に話していてよかった

まずこいつ思った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8831z/>

---

椅子取りゲーム

2011年12月27日20時54分発行